

第13回読書会

「女の一生」伊藤比呂美（2014、岩波新書）

蜂須賀 裕子

「家族をめぐる読書会」でいろいろな本を読んで、いろいろなことを考えました。たまたま昨年から関わっている立川市男女平等参画課の広報紙では、ジェンダー問題が議論されています。そこで「フェミニズム」という言葉がよく用いられるのですが、それが気になり始めました。この本を手にとったのは、それがきっかけです。

フェミニズム詩人ともいわれている著者の伊藤比呂美は、私と同世代。学生時代、周囲で彼女の詩（現代詩）が話題になったことが何度かあります。「きっと便器なんだろう」とか「生きた男の一部分」とかの詩を発表し、「下着をとっかえないの」「胎児はうんこだ。出産は排便の快感だ」などと発言し、一部では「出産詩人」とか「毛抜き詩人」などとも呼ばれていました。これについて、彼女は、民俗学者宮田登との対談で、次のように語っています。

「『胎児はうんこである』と言いきりたかったのは、近代の母子観に対する反発からなんですけどね。（略）母親としては、それこそ生理的に子を育てる、育てられるはずなのに、子どもに対する愛情を必要以上に強要されている。」（『女のフォークロア』、平凡社）。

また、『おなか ほっぺ おしり』（婦人生活社）でも「妊娠出産もあと100回もすれば、月経と同じ用に、日常となるでしょう。わたしの理想である『ごはんを食べるように妊娠して、うんこをするように分娩する』に一步近づいたみたいなきがしました。」と書いています。

彼女は、女性詩ブームを牽引した女性詩人ですが、「女性詩」や「女性詩人」という表現を拒否していました。社会という枠組みの中での「女らしさ」「女性性」に疑問を投げかけていたように思います。そして、マスターベーション、性交、妊娠、分娩など女性の肉体的な体験を素直に赤裸々に語り、これまでの女性詩のタブーを打破しました（彼女のプロフィールは、本書巻末の「或女の一生」に詳しく記されています）。

彼女は、私の学生時代の遊び場でもあった高円寺あたりに住んでいたことがあり、私の友人たちの間でも、その大胆な発言や詩が話題に上りました。ただし、私にとっては「作品は気にはなるけれど、気色の悪いハレンチな女詩人」という存在でした。（実は、私は現代詩という分野が気になっていた。それで、「現代詩手帖」などを読んで、わかったような顔をしていましたが、正直、今でもよくわからないままです）。

今回、この本はテキストとしては、不向きだったなとも思いました。が、「あの伊藤比呂美が、女性たちの悩みについて、こんなにまともな、そして正直な感想を語るんだ」とも思いました（育児エッセイともいえる『おなか ほっぺ おしり』や『いつか死ぬ、それまで生きる わたしのお経』（朝日新聞出版）などはすぐれた作品です）。

そして、彼女は、本書の「たたかう女②社会と女」（p85）で「フェミニストかと聞かれると、その昔は（略）否定していました。（略）ただの女であるだけです、と。しかし今は（略）自分ほど根性のフェミニストじゃないか、とっています。」と語っています。

「フェミニスト」という言葉で概念をくくってしまうことの危うさをあらためて考えました。それは「セクハラ」でも「LGBTQ」でも同様です。「セクハラ」という言葉の誕生で「ブスのひがみ」というゆがめられた声にまどわされることなく救われた女性たちもいますが、それが逆に作用することもあるのです。

そんなことを考えているときに、新聞の書評の『ことばが変われば社会が変わる』（中村桃子著、ちくまプリマー新書）に目が止まったのです。

なぜ、この本をテキストにしたかの理由と言いつつでした。